

松 山 大 学 論 集
第 21 卷 第 4 号 抜 刷
2 0 1 0 年 3 月 発 行

近代の曙——ウィレム・ファン・オランエ

倉 田 稔

近代の曙——ウィレム・ファン・オランエ

倉 田 稔

もくじ
序
前提
本文
結果とその後
その後

序

オランダ革命はブルジョア革命である。だが普通それをブルジョア革命と見ないわけは、1. 独立革命だから、というものである。しかしアメリカ第1革命もそうであったから、それは理由にならない。また、2. 宗教革命だったから、というものである。しかしピューリタン革命も宗教革命と見なされていた。クリストファー・ヒルが初めてブルジョア革命と見るのであった¹⁾。オランダも同じ宗教革命である。だから、オランダ革命がブルジョア革命ではないとは言えない。

オランダ独立は市民革命であって、特に後半はオランダ・ブルジョアジーが政治権力を握った。

前 提

宗教改革は、初めてではないが、ドイツではルター（1483-1546）によって起こされた。スイスでカルヴァン（1509-64）が強力に宗教改革を推し進めた。このルターとカルヴァンの教えがネーデルラント（Nederland、現在のベネルッ

クス3国)に入ってきた。

ネーデルラントはハプスブルク家²⁾の支配下にあった。ハプスブルクはカトリックである。16, 17世紀には、ハプスブルク家は宗教戦争でトルコと戦った(Kannの書を見よ)。

ここではネーデルラントの英雄ウィレム・ファン・オランエ(Willem van Oranje)を扱う。彼は大貴族であったから、彼の革命は表面上はブルジョア革命には見えないが、実態はブルジョア革命であり、またその後はオランダ・ブルジョアジーの革命に転ずる。

本 文

ウィレム・ファン・オランエの父は、ドイツのナッソウ・ディッレンブルク伯ヴィルヘルムであり、ウィレムは、その長男として1533年に生まれた。母は、二度目の妻ユリアーナで、父の従姉妹であった。母はすでに4人の子の母で、未亡人であった。ナッソウ家はその先祖の一人が神聖ローマ帝国皇帝になったことがある。だがこの時、小貴族であった。

ウィレムは、カトリックとして洗礼をうけた。しかし1534年に、両親は、正式に信仰を変え、領地の教会も穏やかにルター主義に変えた。裕福でないから、宗教戦争の中で注目されなかった。こうしてウィレムはルター派になった。

母は11人の子を産み、そのうち男子は4人であった。母はしっかり者だった。

父の兄がハインリヒであり、彼はネーデルラントの地をもっていた。大貴族であった。ここはハプスブルクの支配地である。彼はオランエ公国の一人娘の公女と結婚した。その後、ハインリヒの息子ルネがナッサウ伯オランエ公になった。ハプスブルク家のカール5世³⁾が彼の保護者であった。だが1544年にルネは戦死した。そこで従兄弟にあたるウィレムが相続したのであった。ウィレムは大貴族となった。ウィレムの父は、ナッソウの相続をウィレムではなくウィレムの弟ヨハンに譲った。ウィレムはそこでハプスブルクのブリュッセル

宮廷に出仕した。ハプスブルク家のカール5世が父代わりだった。もちろんウィレムはカトリックになった。

宮廷ではカール5世がいない間は、その妹マリア（＝マルグリッド）が中心で、ウィレムに「ママ」と呼ばせた。マリアはネーデルラント総督で、音楽のパトロンだった。彼女は上手にネーデルラントを支配した。カールとマリアは臣下に対する義務の観念をウィレムに教えた。

ウィレムは、出生地がラインラントで、支配地がネーデルラントとなった。1477年のブルグンド（ブルゴーニュ）公女マリアとマクシミリアンの婚姻以来、ハプスブルク家の世襲領土となったネーデルラントは、ヨーロッパを誇る毛織物工業と、地の利を駆使した仲介商業とによって豊かな富を蓄え、16世紀前半にはハプスブルク世界帝国の最も重要な財政的経済的支柱になっていた。そして北イタリアが盛りを過ぎていたので、この世紀の中葉には、ここは商業的には世界で最も富み栄えた。1531年にアントワープで世界初の株式取引所ができた。ネーデルラントは、都市が工場化されていた。多くが賃金労働者であり、ウィレムは商工業者と接触し、田舎者ではなくなった。ウィレムは、魅力的で活気に満ちていた。他人の立場に共感でき、礼儀正しかった。また自分の敏感さを隠すことができた。

ウィレムは初め皇帝の寢室係だったが、歩兵隊の連隊長になり、その後、副軍司令官になった。彼は歓迎行事をうまくこなした。16歳のウィレムがカール皇帝の息子フェリペ（後の2世）と初めて会った。その時、反感を持った。ただし、後に、フェリペに、ウィレムの長子の代父になってもらうよう頼んだのだった。

ウィレムは、皇帝カールにより、アンヌ・ド・ビューレンと1551年に結婚し、ともに18歳だった。彼女は可憐で、普通の人だった。ウィレムの田舎の館はブレダにあり、華麗な、豊かな生活をした。ブリュッセルにナッソウ館があった。ウィレムは、ドイツ語とラテン語しか話せなかったのに、フランス語、オランダ語、スペイン語ができるようになった。表面はカトリックの生活

だった。

かつて1520年にカール5世は、プラカーテン（宗教弾圧）を發布した。ネーデルラントではカトリックが腐敗し、新教が蔓延した。これをカトリックが迫害したのだった。これで貴族・学者はびっくりし、プロテスタントが民衆に広まった。ルター主義は商人に広がった。再洗礼派⁴⁾は民衆に燃え広がった。

ネーデルラント貿易業者たちは、ルターの信仰の中に折り合う物があるを見た。プロテスタントは、英、デンマーク、スウェーデン、ドイツの半分、に広がった。ネーデルラントは、カール5世の神聖ローマ帝国の心臓部であった。だが同時に、エラスムスを生んだ地方だけあって、宗教改革の精神を受け入れるのも早く、1523年にルター主義の最初の殉教者がアントウエルペンで出ている。

1524年にネーデルラントに異端審問が導入された。1550年、カール5世は、異端審問は皇帝直属と宣した。そしてジャン・カルヴァンの著が禁止された。

カール5世によるスペイン宗教裁判の導入にもかかわらず、1540年以降、新教徒の勢いは北部諸州を中心として、ますます広がっていた。それでもカール5世は、ネーデルラント育ち（ガン生まれ）で、人々のハプスブルク家にたいする忠誠心は保たれていた。

ヨーロッパ的規模で言えば、カール5世、イギリスのメアリ1世、フランスのアンリ2世の下で、新教徒(=プロテスタント)が弾圧された。これらによって移民がアントワープに来て、同市が栄えた。

1555年、アウグスブルグの宗教和議があった。この1555年、死期が迫ったカール5世は、スペイン王位とネーデルラントを息子のフェリペ2世（在位1556-98）に譲った。1556年に、カールは退位した。オーストリア・ハプスブルクは弟フェルディナントに譲った⁵⁾。ウィレムは、フランスとのイタリア戦争をしていたが、カールは退位式にウィレムを呼んだ。カールは、息子フェリペに、ネーデルラント支配にスペイン人を使ってはならないと、忠告した。だが

息子はそれを守らなかった。カールはスペインへ行った。

1556年、全ネーデルラントの統治が、カール5世の嗣子フェリペ2世（スペイン王）にひきつがれると、事態は一変する。もともとこの国は、各州各都市がそれぞれ独立の地位をまもり、身分的共和制の精神を育ててきて、国際的雰囲気のもとで、宗教・思想でも、自由と多様性を重んじた。そこに人一倍専制的で画一的支配の原理しか知らないフェリペが登場し、大きな不信と反発を呼び起こすことになる。

スペイン・ハプスブルクの王フェリペ2世は、エリザベス1世女王の義兄となった。メアリー1世と結婚したからである。彼はエリザベスに結婚を申し込んで、断られたことがある。フェリペ2世は、1543年、ポルトガルのマリーと結婚し、ついで1554年、イギリス女王メアリー1世と結婚したのだった。メアリーの死後1559年にフランスの王家のエリザベート・ド・ヴァロアと結婚した。なお1580年、ポルトガルの王位が絶えたので、これを併合してポルトガル王となった。

フェリペの妻のメアリー1世（イングランド女王）は、血の宗教迫害をおこなっていた。ネーデルラント人はフェリペを、イタリア戦争が終わったら迫害するだろうと疑っていた。スペインの司令官はフェリペルトだった。

このスペインに対してイギリスとオランダが後に敵になる。

フェリペ2世は、当時における最強の君主で、おそるべき絶大な威力は全欧州を併呑するほどで、富力はキリスト教諸侯の富をあわせたよりもさらに大きく、艦隊の威風は四海を払った⁶⁾。

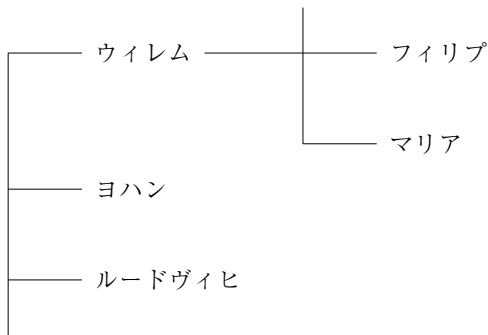
カール5世は、息子をスペイン育ちにした方がよいと見た。スペイン育ちのスペイン国王フェリペ2世は、受け継いだネーデルラントを、スペインを本拠として従属させようとした。フェリペ2世は、ネーデルラントで苛酷な新教徒弾圧を行った。ここに国民は反抗するにいたった。それにたいしフェリペは、アルバ公を派遣し、公は軍事的独裁とテロリズムを用いた。

フェリペは父祖のようにネーデルラントの各都市と交渉したが、これは人々

には屈辱的に感じられただけだった。

スペイン・ハプスブルクは商業の最も栄えていたオランダとイタリアから徴税した。また新大陸から途方もない銀が流入し、全税収の3分の1から4分の1となった。スペインの軍事力も世界最高であった。スペインはしかし自国の力を過大に見、プロテスタントを過小評価した。

ウィレムの妻アンヌが亡くなった。ウィレムの愛人イヴ・エリンクスは、ユスティンを生む。



ネーデルラントの大貴族エグモントは、対フランス戦でサン・カンタンで勝利した。ウィレムの弟ルードヴィヒもこれに加わった。1559年、スペインは、フランスとの条約をアンリ2世と結ぶことになった。和約がされることになり、ウィレムもカトー・カンブレジの和約会議に出席する。エグモント、アルバ公、ウィレムがパリに送られた。この時パリに丁度フランス王太子妃メアリ・シュチュアート⁷⁾もいた。アルバ公は、フランスとスペインが合同して異端者を掃滅しようという計画をもち、アンリ2世はこれをウィレムに打ち明けた。ネーデルラントでやる、と言う。ウィレムは呆然とした。彼はこのとき沈黙していた。ここからウィレムに「沈黙」という綽名がついたのである。王に従うか、正義に従うか。主人か人民か。彼は後に人民を選ぶことになる。幼い日のディレンブルクでの教育の影響があった。サンタントワヌで歓迎の馬上

試合をしたが、アンリ2世は目を槍で刺され、10日後になくなった。そこでアルバの計画は棚上げになった。フェリペ2世とフランス国王長女とが結婚した。一方、アンリ2世の幼い息子がフランソワ2世として国王になり、その妃メアリー・ステュアートがフランス王妃になる。

ウィレムは、かつてカール5世に可愛がられ、重用されたが、カールが亡くなり、ウィレムは、だんだんはずされる。フェリペのウィレムへの嫌悪は不信になる。フェリペは国を考え、ウィレムは人間を考えた。

ネーダーラントの人々はスペインの支配地になったと感じなかった。ネーダーラントは各州のより集まりで、各都市が自治を持っていた。1500-1580年にアントウエルペンは国際都市で、世界の貿易と金融の市場だった。ネーダーラントは300万人の人口で、300余の都市があった。

ウィレムは、ホラント、ゼーラント、ユトレヒトの州知事だった。彼は宮廷ではフランス語を使った。

ネーダーラントの革命は、始めは貴族、最後に小商人階級の闘争になる。ネーダーラントは自分を世界第一級の国民とみていた。

フェリペ2世はネーダーラントに9年間の特別税を課した。全国会議は反対したが、拒否できなかった。そこで抗議文を添えた。ウィレムとエグモントが代表であった。

8月、フェリペ2世はネーダーラントを去り、スペインに戻るようになった。貴族達がミデルブルフへ見送りにきた。フェリペは不機嫌だ、「議会ではない。お前だ」と、ウィレムに言う。ウィレムは、スペインまでついてゆくつもりだったが、やめた。フェリペはウィレムを裏切り者だと見た。

フェリペ2世は、ネーダーラント不在のために、異母姉マルハレータ・パルマ公妃を執政に任命した。カール5世の娘である。

1559年、ウィレムの父ナッソウ伯が死去し、弟ヨハンが実家を継いだ。ウィレムの妻が亡くなった。

幼いフランス国王が病死し、ウィレムは、そのフランス王妃・メアリ・シュ

テュアートに間接的に結婚の誘いをしたが、彼女は耳を傾けなかった。がっかりしたが、これは高望みだった。ウィレムは、ザクセン公女アンナとの縁談を考える。

ウィレムはマルハレータ・パルマに、ドイツでの噂つまり、フェリペ2世がフランスの助けで、ネーダーラントのルター派に武力攻撃を計画していると、信じられている、と語った。

フェリペがスペイン軍を撤退させると述べていたが、何もしないので、ウィレムは、エグモントと共に撤退を促した。1561年、スペイン軍隊はスペインに去った。

だがフェリペ2世は、教会政策で譲歩しなかった。イエズス会を導入した。この教義は、トリエント公会議⁹⁾でつくられた。

フェリペ2世の教会改革は、軍隊撤退の直後だった。修道院長その他聖職者は国王の任命とした。これでネーダーラント貴族は怒った。貴族は、高位聖職者を次男以下の就職先とみなしていた。これがまたネーダーラントの人々に相談無く行われたのだった。当時の首位聖職者はグランヴェルだったが、彼にも相談なしだった。フェリペのねらいすました攻撃であった。フェリペは、ネーダーラントで教会顧問から貴族を排除した。ウィレムはマルハレータ・パルマに、国王の命令はふさわしいものではないと、語った。

ザクセンのアンナとのウィレムの結婚のニュースで、フェリペ2世は怒った。新しいオランエ公妃はカトリックでなければならない、と。アンナの祖父、ヘッセン地方伯は、この結婚に反対した。オランエがカトリックの宮廷で生活しているから、などが理由だった。だがアンナはウィレムを好きになった。ウィレムはネーダーラントの主だった貴族に結婚式への出席を求めた。フェリペ2世はそれを禁止したが、集まった。ウィレムの妻は、私的にはルター派だった。

フェリペ2世がネーダーラントを去って、ネーダーラントの大貴族は2つに分かれた。ウィレム、エグモント、ホールネ（ネーダーラントの海軍提督）が一方で、それに対して、国王とグランヴェル側についたのは、アールホルス

ト、アーレンベルクだった。グランヴェルは有能だった。当時スパイが沢山いた。

1561年、フランスで最初のユグノー戦争が起きた。フェリペ2世はネーデルラントから軍隊を送り、フランス宮廷を支援しようと考えた。これをネーデルラント国務会議に提出した。ウィレムは、命令権は国王にない、と言った。ウィレムが最高司令官だった。

ハプスブルク皇帝フェルディナントの子、マクシミリアン(位 1564-76)は、教養があって、プロテスタントに友好的であった。彼は皇帝になった。ウィレムは即位式に参列した。

かつてフェリプ善良公(ブルゴーニュ公国の)が金羊毛騎士団を作っていた。エグモントはその金羊毛騎士であった。エグモントの妻はファルツ選帝侯の妹だった。ウィレム、エグモント、ホールネは、国務会議を司宰するグランヴェルの解任の手紙を 1563 年に書いた。ブラバント議会は特別税の支出を拒否する決議をした。国王(フェリペ2世)とグランヴェルはこれら脅迫を拒否した。ウィレムらは国務会議をボイコットし、そのためグランヴェルは自ら去った。そこで3人は国務会議に戻った。

ウィレムは11歳までルター派信者として育てられた。個人生活的にはカトリックにふさわしかった。彼は、暴力と残酷を憎み、人民の繁栄と現実的な統治が政治家の目的だと考えた。焚刑など、痛ましい見せ物だし、神を満足させない、と思った。

ルター派は穏和であり、カルヴァン派は人類の大多数が地獄に落ちるとした。両派は衝突した。カルヴァン派の最強者がユグノーだった。ウィレムは両派の和解が望ましいと思うのだった。統一したプロテスタントだけがカトリックに対抗できるから、と。宗教は、二次的なのだ、と。ウィレムは、プロテスタントのための闘士になろう、スペインの影響をネーデルラントから排除しよう、と思った。

ネーデルラントではグランヴェルが去ってから、下級貴族がプロテスタント

になり始めた。主としてカルヴァン派になった。ネーダーラントから最良の労働者がイングランドやドイツに集団移住させられていた。彼らは当地に技術を伝えた。

トリエント公会議の決定をネーダーラントで公布せよと、フェリペ2世は命じた。カトリックもプロテスタントもこれになじめなかった。全国会議の審議を経るべきだったが、そうしなかった。

1565年、エグモン트는スペインから帰ってきた。ネーダーラントの反対論を代表としてフェリペに陳述するために行っていたのである。フェリペは、心は別として彼を愛想よく迎えた。マルハレータ・パルマの息子・パルマ公は、エグモンとともにマドリッドからブリュッセルへ行った。

フェリペ2世はエグモン트가去ってすぐ、ネーダーラントから異端を一掃する教会改革を命令した。エグモン트는怒った。1564年、ヴェランシエンヌ、モンス、ブリュージュ、アントウエルペンで、聖像画破壊とプロテスタント囚人の解放がおこっていた。ウィレムは、ホラント、ゼーラント、ユトレヒトを管轄していた。

司教たちの委員会はトリエント公会議の決議に賛成した。ウィレムは拒否した。南部から北部へ移住者がきた。

フェリペ2世は宗教政策を行うと指示した。国務会議議長ヴィグリウスさえも懸念した。凶作と不況、穀物騰貴の所へ、プラカーテン（宗教弾圧）を強制したからだ。ウィレムの弟ルートヴィヒは、政府に公然と反対した。

1566年2月、ウィレムは辞表をだす。異端審問を国家が指示することはネーダーラントの国制に反する、と。ウィレムは、アントウエルペンの商人たちと交流した。市法律顧問ウェセムベークが彼の相談役になる。

抵抗派は貴族同盟といわれた。国王に公開の手紙を書いた。宗教政策を改めよ、異端審問をやめよ、と。「盟約書」（＝請願書）を書き、署名を集めた。ただし高名な3人は署名しなかった。

3月、マルハレータ・パルマは国務会議を開いた。一方、ブレードローデと

(ウィレムの弟) ルートヴィヒとが手を組んだ。

1566年4月、盟約書は整った。ブリュッセルでマルハレータはそれを聴聞することになった。顧問ベルレーモンは「これら乞食達」と言った。そしてそれをパルマ執政に手渡した。ブレードローデたちはクーレンボルフの家を使い、ブリュッセルを走り回った。彼らは、言われたように乞食の鉢を身につけた。かの3人がクーレンボルフの家に立ち寄った。そこで彼らがここに加わったとされ、ウィレムが同盟の秘密メンバーだと噂された。アントウエルペンで騒ぎがおき、ウィレムが行く。ウェセムバートを副官に任命した。騒乱の要因は、食糧価格の高騰、商業低迷、仕事のなさだった。それは、毛織物工業のイギリスとの競争が要因であった。ウィレムがブリュッセルを去ってから、1566年8月19日から5日間聖像破壊運動がおきた。

マルハレータは、小貴族たちと3大貴族が手を結んだと見た。8月24日、マルハレータは「同意書」を發布し、プロテスタント禁止を取り消した。しかしマルハレータは党を作った。反動が広がった。

10月初、ウィレムはテルモンデで会合を開き、ウィレムとエグモントが話しあった。エグモントは、フェリベを信ずる、自分に対立してこない、と言う。

ウィレムの弟ルートヴィヒが反乱を組織し始めた。フェリベ2世はドイツで兵を募集し始め、スペイン軍をネーデルラントに向けた。ウィレムは反乱と忠誠の間で迷った。

1567年2月、マルハレータ・パルマは、国王に対する忠誠の誓いをすべての大臣からとろうとした。アールスト、ベルレーモンは誓約した。エグモントは遅れて誓った。ウィレムとホーフストラーレンは拒絶した。

1567年3月、ブレードローデがホラントで蜂起した。ヤン・マルニクスは南部で蜂起した。これに対抗してアルバ公⁹⁾が軍とともにやってきた。

ブレードローデはアムステルダムを占拠したが、反徒たちは酒場へ消え、失敗した。

ヤン・マルニクスらはアントウエルペンを襲った。ウィレムはそれを沈静さ

せた。無駄な殺戮を回避したのだ。しかしウィレムは決意した。4月、辞表を出し、家財を売り払った。そして5月に、妻と2人の娘、150人の奉公人と共にブレダを去り、ドイツのディレンブルクへ行った。

アルバは1567年8月、ブリュッセルに入った。9月にマルハレータは執政を辞任した。

アルバはエグモントとホールネを拘留した。アルバは「騒擾対策委員会」を置いた。これは「血の委員会」といわれ、3人のスペイン人がメンバーだった。いままでと違い外国人がネーダーラントの人を裁くことになった。そのうちの1人ヴァルガスは冷酷で拷問好きで、アルバは彼の意見だけを聞いた。

9月にウィレムが侵入すれば、革命のチャンスだったが、ウィレムには軍がなかった。彼は兵を雇い始め、ドイツ諸侯からボランティア派遣を願った。

アルバはテロを用い、反乱を窒息させ始めた。公人を逮捕し、すこしずつ処刑をし、財産・武器を奪った。

11月、ウィレムの妻アンナは男子を生む、マウリッツである。将来の軍の天才で、戦争様式を一変させる人である。

アルバは1568年初め、84人のネーダーラント人を公開処刑する。ルーヴァンにいるウィレムの長男を捕まえ、スペインに送った。3月、1,500人のネーダーラント人が逮捕された。ディレンブルクでウィレムは亡命者を集めた。ファルツ選帝侯も亡命者を受け入れた。ウェセムベークが来た。ウィレムは演説家だったが作家ではなかった。だからウェセムベークの助力は重要だった。ウィレムの著「正統なる主張」が印刷される(1568年)。16世紀の教養人は、正式の君主に対する不忠は犯罪であることを知っていた。だからここでは悪事が邪悪な顧問の仕事だと述べた。まさか80年戦争になろうとは、ウィレムは思わなかった。ケルンで彼の軍隊が大きくなった。彼はケルンへゆく。軍資金がネーダーラントから流入する。ユグノーと連絡をとって、協力が約束された。

3つの侵入計画が作られた。1. ルートヴィヒがフリースラントへ、2. ホフストラテンが南部へ、3. ユグノーはアルトワへ、である。

ウィレムはドウイスブルクに中心部隊を集め、決定的な時点で侵入する、とした。

2の、ホフストラテンが病気になり、ヴィレ（ウィレムの配下）が指揮をした。ルートヴィヒがフリースラントへ入った。ユグノーはネーデルラントに入る前、フランス国王軍に遮られた。ウィレの軍は包囲され、捕えられ、ウィレは作戦と軍資金の出所を白状した。

アルバはアーレンベルフとメーヘレンを北方に派遣し、ルートヴィヒを討てと命ずる。フリースラントでは人々は政府軍に敵意をもち、ルートヴィヒは海賊（＝海乞食）から補給を受けた。ルートヴィヒは後退し、しかしアーレンベルフの軍を破った。ウィレムの弟アドルフは戦死した。

アルバはこれに対し、ブリュッセルのグラン・プラスで60人以上を処刑した。アルバは6月5日、エグモントとホールネを処刑した。

こうしてネーデルラント民衆は、1568年、ついにウィレム・ファン・オランエのもとに武器をとって立ち上がった。

ウィレムにはしかしもう支援が来なかった。ルートヴィヒ軍はアルバの軍に攻撃された。ウィレムはドイースブルクで総員集合をかけ、8月8日、2万5千が集まった。ウィレムには資金が1ヶ月分しかなかった。そこでブラバントへ出陣した。ムース河を渡った。アルバは退路を断った。ホフストラテンが戦死した。ウィレムはフランス側ユグノー陣へ逃げ込んだ。すべてを売って傭兵に支払った。ウィレムはすべてを失った。しかしウィレムは学んだ。今まで中庸の道を進んできた。しかし不寛容な道だけが狂信的な敵を克服できる、そこで彼はカルヴァン派に転向した。

反乱の初期の局面は、フェリペ2世の統治にたいする封建諸侯（ほとんどカトリック）の抵抗であった。

1569年、ファルツ選帝侯の婚約の祝いで、ウィレムはその息子カジミールに会う。マルニクスがウィレムのもとにきた。ウィレムとルートヴィヒはカジミールのユグノー軍に加わった。そしてジャルナックで戦った。首領コンデ公

が戦死し、コリニー提督が継いだ。モンコントゥールでユグノーは敗れた。しかし 1570 年にサン・ジェルマンの講和がされた。オランジュ（＝オランエ）公国がウィレムに返還された。コリニーの外交手腕でユグノー軍が救われた。ウィレムはユグノーと連携する。

海乞食は増大していた。彼らはウィレムのオランエ公国の旗を使った。これはオランダ海軍の母体になる。

ウィレムはドイツへゆく。借金の申し込みだ。妻アンナは浪費し、分別がない。その上、姦通をした。切られるところを、離婚となった。相手は命を許された。その相手の子が高名な画家ルーベンスとなる。

ネーダーラントで抵抗する者は、森乞食となった。海乞食が増えた。彼らはウィレムと秘密の連絡を取り、献納金を納め、海乞食は武器を運び込んだ。スペイン軍は駐留し続け、スペイン人は高官になり、ネーダーラントはスペイン人への憎しみが増大していった。

アルバは課税した。諸都市は拒否した。スペインはイギリスに海乞食が港を使用するのを禁止させた。そこでかれらはやむなく、デン・ブリルに來た。スペイン軍はちょうど他所にいた。海乞食の指導者はラ・マルクだった。住民は支持した。オランエの旗を町に掲げた。ルートヴィヒはそれを知り、フリーシンゲンを 72 年 4 月に占拠した。続いてロッテルダム、シェダム、ハウダ、と続いた。セーラント、フリースラント、ホラントは、オランエ側につくと宣言した。

アルバは、北のラ・マルク、南のルートヴィヒと戦うことになった。6 月、ウィレムはディレンベルクを出発し、総兵力が 2 万になった。72 年 7 月に、ライン川を越えた。ウィレムはネーダーラント北部をかためた。問題は南部だった。そこはユグノーの支援にかかっていた。

1572 年 8 月、サン・バルテルミーの虐殺が起こった。コリニー提督が暗殺された。だからユグノーから援助されなくなった。ウィレムは、エルモントでスペイン軍におそわれる。

アルバの軍はナールデンとズトフェンをおとし、皆殺しにする。

ネーダーラントにはルター主義に遅れてカルヴィニズムが入った。北もカルヴィニストが反乱の推進力になった。ホラント州議会はウィレムを知事に選んだ。

ウィレムは稀な人だった。友人を沢山もった。先見の明があり、軍将校に信頼された。軍事技術が素晴らしかった。それに軍事的才能以上のものがあった。彼は軍を統率した。大きな戦略と社会的同情心があり、善良だった。土地の人の幸せのために働こうとした。誠実で、野心を持たなかった。

乞食党のラ・マルクが、市民を掠奪したので、ウィレムは、彼を監獄にぶちこんだ。ソノイとボワソを指導者にし、海乞食は規律ある戦力になった。

ルートヴィヒはアンリ・ド・ブルボンの母（プロテスタントであった）と連携した。

1572-3年の冬、スペイン軍はハーレムを包囲し、降伏させようとした。アルバへ書状を渡しにいった使者を捕まえた。ハーレムは抵抗したが、7月、陥落し、残酷に扱われた。アルバの息子がここを征服した。ハーレムの悲惨にネーダーラント人は怒った。ウィレムはハーレムを救えなかった。アルバはアルクマールを攻撃することとし、それを息子ドン・ファドリクにさせた。市民は虐殺されるので戦わざるをえない。堤防を切ってスペイン軍を水びたしにして食い止めた。

海乞食は、同年、エンクハイゼン沖でスペイン艦隊を襲った。海乞食が海上を支配した。1573年11月、フェリペ2世は総督アルバを罷免し、レクセンスを任命した。彼はブリュッセルに来了。12月、アルバはスペインに戻る。

1574年、ウィレムはミッデルブルフを奪った。そして敵を寛大に扱った。

スペインはレイデンを狙う。スペインはルートヴィヒの軍を襲った。ルートヴィヒは戦死し、弟ハインリヒも戦死した。レクセンスの宥和政策を、ネーダーラントは拒否した。レイデンが包囲された。飢餓状態となった。海乞食が救援に来て、堤防を切って防いだ。1574年10月、スペインは、レイデンから立

ち去った。人々は解放記念に大学をたてた。

ウィレムの戦略は、外国の誰を味方にするかだった。フランスはカトリクス・ド・メデイシスが適当に援助した。イギリスのエリザベス1世は、側面から助けていたが、フェリペ2世の要求に屈して、スペインがイギリスの港を使うことをレケセンスに許可していた。

ウィレムの妻になるであろうシャルロッテ・ド・ブルボン、家族と縁を切れ、修道院長になった。プロテスタントになり、ハイデルベルグに亡命し、ファルツ選帝侯の客人になった。シャルロッテの父はフランス国王の従兄弟だった。1575年、ウィレムと彼女は愛情にもとづいて結婚する。彼女は非常に立派な女性だった。

レケセンスは、1574年、再びレイデン攻撃を考え、1575年に行う。

1574年、アンリ3世が即位した。1576年、フェリペのスペインが破産し、レケセンスは病死した。

ホラントとゼーラントは、ウィレムに権限を与えた。スペイン軍は、給料が払われず、暴徒と化した。

アントウエルペン、76年、市民が掠奪され、虐殺され、3分の1が焼かれた。

ガンで全国委員会が和平条約を結ぶ。ネーダーラントの統一を16州が決めた。ルクセンブルクは加わらなかった。

ドン・ファン（フェリペの異母弟）が新長官となり、ネーダーラント執政としてやって来た。彼は、カール5世が、あるドイツ女性に生ませた人だった。彼は1571年にレバント海戦で名をあげた。彼の理想は、ネーダーラント北部の反乱を鎮圧し、イギリスへ侵入し、とらわれのスコットランド女王を解放し、結婚する、ブリテンをカトリックにする、というものであった。しかし状況が困難なので、ドン・ファンは平和を主張した。南部の代議員がドン・ファンを慕った。

スペイン軍の横暴に対してガンの平和ができた。ドン・ファンはそれを助け

と言う。南部貴族のアールスホト、市民階級は全国会議で多数だった。全国会議は第2の条約「ブリュッセル同盟」を作る。ドン・ファンはそれを受け入れる。

ホラントとゼーラント以外のすべての州は永久平和令に署名した。ドン・ファンはネーダーラント執政として受け入れられた。だが永久平和令はガンの和平の侵害であると、ウィレムは抗議を出す。事実、ドン・ファンはスペイン軍を追い払わない。ドン・ファンは、ナミュールを攻撃し、追い出される。

全国会議はウィレムに権限をひきうけてくれと懇願した。ウィレムはブリュッセルの全国会議に行く。

南部は2つの言語で分裂していた。富と支配の南部が、北部を受け入れない。北部は、カルヴィニストで、少数派だったが、支配権を握った。南部はカトリックで、市民を恐れていた。

ウィレムはブリュッセルで歓迎された。貴族アールスホトは野心と陰謀があった。そこでアールスホトを失脚させた。だが2人のカルヴィニストがガンを握った。

1577年、パルマ公（マルハレーテの息子）アレッサンドロ・ファルネーゼがくる。

ウィレムはハプスブルクのマティアスを推した¹⁰⁾

ウィレムは、南北合同軍隊の最高司令官になる。1578年、マティアスは新しい執政となる。これを全国会議で認めた。パルマ公は、南部で襲撃を加える。ドイツ帝国議会はネーダーラントへ援助しないと決めた。ヨハン・カジミールが議会に申し出た。アンジューがモンスに突然現れる。彼は、フランス国王子で、アンリ2世とカトリーヌ・ド・メディシスとの間の子である¹¹⁾

ドン・ファンが1578年に急病死した。そこで職をパルマに譲られた。パルマは、極南部を得、不平党を組織した。リール、ドウエ、オルシ、エノー、アルトワ州が、パルマの下で政府を作りたいというアラス同盟ができた。そのため北の諸州はユトレヒト同盟を作った。ホラント、ゼーラント、フリースラン

ト、ユトレヒト、ヘルデルラントだった。闘争はカルヴィニズムとカトリックとなった。ウィレムもパルマもネーデルラントの統一を考えていた。フェリペ2世は、ウィレムの命に懸賞金をかけた。ウィレムはアンジューとの同盟策を考える。80年、アントウエルペンと他の州も、やむなく同意した。アンジューは「君公」となる。アンジューは、軍隊と軍事補助金を出すことになる。

12月、ウィレムは「弁明」を書く。ここで初めてフェリペの君主権を否認した。新しい政治理論だった。モルネはこれを承認する。1851年、アムステルダムで独立宣言が起草された。ウィレムは政府代表になった。モルネの『反暴君論』が出た。フェリペ2世の廃位布告をした。統一こそが力だ、の考えだった。マティアスは去った。ウィレムは主権者には断固ならなかった。

ネーダーラントとしては、フランス、イングランドと友好でなければならなかった。フランソワ・アンジューは、エリザベスに求愛する。彼は政治的には重要人物だが人格はおとる。イギリスへ行ったアンジューは、エリザベスに断られる。

1582年、ポルトガル商人アニャストロが、使用人ジュアン・ジョレギューにピストルでウィレムを撃つよう指示した。3月18日、ウィレムは撃たれたが回復した。フェレギューはその場で殺された。5月、ウィレムの妻シャルロッテが、水垢離をしたので、病死した。急性肋膜炎だった。

アンジューは、全国会議とウィレムを倒そうとした。アンジューがアントウエルペンを攻撃した。だが失敗した。それでもウィレムは、アンジューと同盟せよと言う。

1583年、ウィレムはルイーズ・ド・コリニーと結婚した。コリニー提督の娘だった。彼女はテリニーの領主と結婚したことがある。しかしサン・バルテルミーで、父と夫を失った。ウィレムとの2人の間で、1584年、フレデリック・ヘンドリックが生まれる。

ウィレムは、アンジューと手を切ってフランスを敵とするわけにはゆかない。そのアンジュー大公が急死した。

84年7月10日、バルタザール・ジェラールは、デルフトで、ピストルで、ウィレムを狙撃し、暗殺した。ウィレムは52歳で死んだ。デルフトの新教会に埋葬された。彼の長男フィリップはスペインに囚人として、いた。

ユトレヒト同盟加盟諸州で、全国会議議長にメートケルク、国務会議の議長にマウリッツがついた。パルマ公ファルネーゼは南部を占領した¹²⁾。

結果とその後

1581年、ネーデルラント北部七州の独立宣言は、新教徒たち、主にカルヴィニストによってかち取られた。ウィレムは暗殺されたが、息子マウリッツ、革命児オルデンバルネフェルトらの活躍で、1609年に事実上の独立を達成した。しかしそれは北部ネーデルラント（今のオランダ）であった。南部ネーデルラント（今のベルギー）はスペインに屈服した。

この間、エリザベス1世は、レスター伯を4,000の兵と軍事援助資金とともに派遣した。（これはほとんど役に立たなかった。）大局的に見ると、独立運動に最大の力を貸したのは、イギリスだった。エリザベス女王は、ネーデルラントの海上遊撃隊を側面から助け、スペイン軍の補給を妨げた。いまや一流国にのしあがろうとしているイギリスの第一級の国は、さしあたりスペインの優位を打破し、かつ取引先のネーデルラントと親しい関係を維持することだった。

そ の 後

フェリペ2世とローマ法王は、ウィレム・ファン・オランエと並んで、エリザベス1世の暗殺を指令した。エリザベス1世が、メアリ・シュチュアートを処刑したことが理由となり、スペインはイギリスを攻めた。だが、1588年スペイン無敵艦隊が破滅した。

フランスではギーズ公が暗殺された。1589年にフランス国王アンリ3世が暗殺された。こうしてアンリ・ド・ブルボンが国王になる。

フェリペ2世は、パルマにフランス介入を命じた。そのため、ネーダーラン

トからそれた。マウリッツが軍事的に北で勝利した。ネーダーラントは南北で分裂し、北はオランダとなり、南はベルギーになる。北の革命はその後、オランダ商人の力で行われることになる。こうしてオランダはブルジョア民主主義革命を行うことになる。ウィレム・ファン・オランエはその先行者となった。

注

- 1) C・ヒル『イギリス革命』
- 2) さしあたり拙書『ハプスブルク歴史物語』（NHK ブックス）で記したので、省略する。
- 3) 江村洋『カール五世』。ペレ『カール5世とハプスブルク帝国』。拙稿「ヴェルディのオペラ「エルナーニ」」（小樽商大『言語センター広報』8号）。
- 4) プロテスタント急進派。ツヴィングリ派など。
- 5) 東方のハプスブルクのフェルディナント1世の息子が、マクシミリアン2世（1564年即位）である。その跡を継いだのが、ルドルフ2世である。彼はスペインで学んだ。病弱で精神的に不安定であった。国務をとらず、主にプラハに住んだ。天文学のケプラーやティコ・ブラーエなどがとりまきにいた。1608年に弟マティアスに政権を奪われた。
- 6) シラー『オランダ独立史』上 岩波文庫。
- 7) 伝記として、シュテファン・ツヴァイク『メアリー・スチュアート』上・下、岩波文庫。
- 8) トリエント公会議（1545-1563）。南イタリアでのカトリックの会議。反宗教改革をすすめた。教皇パウルスが決断し、開かれた。カール5世も協力すると言った。始めプロテスタントとの妥協を意図したが、糾弾にいたった。
- 9) Fernando Alvarez de Toledo アルバ公 Duque de Alba（1508-1582）カール5世のためにドイツの新教勢力と戦い、シュマルカルデン戦争、ミュールベルクでザクセン公を、1547年に破る。イタリアで皇帝軍を指揮し、1553-59年、フランス軍と戦う。1556年にナポリ総督。1559年にカトー・カンブレジ条約をまとめる。1567年からネーダーラント総督となる。1万数千人以上を処刑した。彼は解任され、宮廷からも遠ざけられる。その後、起用され、1581年にポルトガルを破り、合併を成功させた。
- 10) 彼は後にドイツ皇帝になり、ボヘミアで生活する。白痴だった。ハプスブルク皇帝ルドルフの弟マティアスである。
- 11) エルキュール・フランソワ・アンジュー（1555-1584）、上の兄姉は、フランソワ2世、シャルル9世、アンリ3世、エリザベート（フェリペ2世と結婚した）、クロード、マルグリッド（アンリ4世と結婚した）、である。彼はしかし、アンリ3世より若死にしたので、フランス国王になれなかった。エリザベス1世との結婚が推し進められたことがある。
- 12) ウエッジウッド『オランエ公ウィレム』文理閣。

注以外の参考文献

- シラー『オランダ独立史』上下 岩波文庫 1949
 羽田正『東インド会社とアジアの海』講談社
 ポール・ケネディ『大国の興亡』上下
 石坂昭雄『オランダ型貿易国家の経済構造』未来社 1971
 教養文庫『世界の歴史』7 250 ページから
 岡崎久彦『繁栄と衰退と』文春文庫 1999
 ツヴァイク『エラスムスの勝利と悲劇』みすず書房
 ヨハン・ホイジンガ『レンブラントの世紀』創文社 1968
 ヨハン・ホイジンガ『中世の秋』創文社 1958
 C. ウィルスン『オランダ共和国』平凡社
 今来編『中欧史』山川出版 1971
 ブロール『オランダ史』白水社
 Pieter Geyl, *The Revolt of the Netherlands*. 2 vols. London 1932
 「オルデン・バルネフェルト伝」2 巻, 英文
- 戯曲 ゲーテ「エグモント」(『ゲーテ全集』3 人文書院)
 『オランダ・ベルギー』新潮社
 音楽 バートーヴェン「エグモント序曲」